

# 芹沢文学読書会

案内通信  
No. 158  
2022年10月16(日)  
(令和4年)

## 10月便り

新型コロナウイルスの第7波が少しずつ減りつつあります。日本でも海外からの旅行者を制限無しに受入れようになりました。台風14号は、暴風で真上を通ることが心配されましたが、余り被害が無かったのは幸いでした。10月になり、朝夕は涼しくなりましたが、昼間は残暑が続いています。今年は柿が豊作で、実がなり過ぎています。甘柿は取って食べていますが、渋柿は熟柿になってカラスが食べています。今の子供達は、琵琶や柿などは食べないようです。涼しくなって、ラジオ体操の後に、近くの海浜への朝散歩をしています。台風の高波で砂が抉り取られ、木竹やゴミが沢山打ち上げられています。散歩しながら貝殻を拾い、プラスチックごみを拾っていますが、こんなになつては、片付けたり拾ったりする意欲がなくなってしまいます。熱心に片付けている人もいます…。

読書の秋です。芹沢文学読書会は続けています。マスクをして気楽に大分県立図書館へお出掛け下さい。読書会は、随想集『文学者の運命』の随想を二つずつ読み語っています。

秋深し  
豊作の柿  
カラス食う？  
松林庵主人

## 第158回・芹沢文学読書会

①日時: 11月13日(日) 午前10時~12時 [\*通常は第2日曜日午前です]

②会場: 大分県立図書館 研修室 No.2 [\*今回は特別に研修室No.2です]

③内容: [I] 芹沢文学に関する話題や情報 10:00~10:10 am 自由に話す。

[II] 芹沢文学読書会 10:10~11:40 11:45~12:00 am 輪読

○テキスト 随想①「私は帝国大学に再入学しようとした」 随想②「文章をさがして」

\*随想①は処女作「ブルジョア」が一等に当選し、「我入道」が縁で、朝日新聞の夕刊に『明日を逐うて』を連載して作家として生きようとしています。文体を模索し、東大の文学部で学ぼうとしたこと。随想②は、自分の文章を求めての模索で、中国の取材旅や谷川徹三の助言、西田幾多郎の哲学のことが書かれています。

初出/『ノーベル賞文学全集』(主婦の友社発行)の月報。①昭和46年10月、月報13 ②昭和46年11月、月報14  
初刊本/『文学者の運命』昭和48(1973)年6月10日 主婦の友社発行。98~113頁。

再録/『芹沢光治良文学館12』平成9(1997)年8月10日 新潮社発行に収録。61~69頁。

=次回は、来年の1月8日(第2日曜日)午前の予定です。=

◎同封資料 ;随筆「コム・マメール 一わが母の如くー」 芹沢光治良 雑誌「ひまわり」ヒマワリ社  
昭和22(1947)年9月1日[8・9月合併号]中原蒼二発行。巻頭。\*画家中原淳一編集のカラー表紙の雑誌。その巻頭に書いた随筆。戦後の女性の生き方。本文の活字が小さいので拡大コピーした。[資料提供/中村輝子]

## 芹沢文学・大分友の会



連絡先: 〒872-1651 大分県国東市国東町浜 4765(番地) 小串信正方

☎ FAX 0978(77)0565 郵便振替口座 01970-5-16072/芹沢文学・大分友の会

☆ 第157回・芹沢文学読書会の報告 於 大分県立図書館・研修室No2 J♪♪♪

第157回の芹沢文学読書会が、9月11日(日)に大分県立図書館の研修室No2で行われました。参加者が少なかつたのですが、熱心に読書会が行われました。

今回のテキストは『文学者の運命』の二随想「創作は疲れるものだ」「書齋のなかに大理石の素材を持ちこんでいるのだがー」でした。『芹沢光治良文学館12』(平成9年8月10日新潮社発行)の53~60頁を輪読しました。「創作は疲れるものだ」には、戦中に山荘の空地で野菜を作った体験を語り、創作も同じで疲れること、前田教授と語ったことが書かれています。「書齋のなかに大理石の素材を持ちこんでいるのだがー」では、作家は彫刻家と同じように、書齋に大理石を持ちこんで一心に彫刻しているのだと説き、ロダンの秘書になった詩人リルケのことを紹介しています。万年筆や原稿用紙はその道具であるに過ぎないと語っています。戦後の創作の苦痛から喘息になったとも書いています。

次回も、『文学者の運命』の二随筆を読み語ります。どうぞ、御参加下さい。

◎令和3(2021)年度 芹沢文学・大分友の会 会計報告(2021.9~2022.8) ♥◇♣♠

=少し遅くなりましたが、会計報告をいたします。御了承下さい。=

収入の部	前年度繰越	3,687円	支出の部	切手代	8,400円
	会費収入	14,290		文具代	2,415
	寄付収入	14,827		コピー代	14,435
	テキスト代	0			25,250
		32,804			

会計決算 32,804 - 25,250 = 7,554円(振替627+現金6927円)

会計責任 小串信正・会計監査 中村輝子

【現状と反省点】

①芹沢文学・大分友の会として「芹沢文学読書会」を26年間継続しました。大分市の出来本柳子さんが退会されました。会員数は10名になっています。芹沢文学研究会と兼ねる会員は7名です。読書会への参加者は約6名で行っています。何か工夫して新入会員を増やしていかなばなりません。新会員をお誘い下さい。読書会への御意見をお寄せ下さい。

②熱心な会員の篤志の寄付で、年会費を1200円に維持しています。読書会には参加出来ないが、通信会員として継続してくれている人々もいます。今後も御協力をよろしくお願い致します。次年度も、会報を年6回発行し、読書会を奇数月に年6回は継続して行きたいと思致します。

○令和4(2022)年度の年会費の納入をお願いします(振替や持参で)。 ♪♪♣☆

9月から新年度になりました。年会費の納入をお願いいたします。篤志者の寄付により今年度の年会費も1200円に止めていますので、納入をお願いいたします。読書会に持参するか、同封の郵便振替の払込取扱票にて納入して下さい。寄付も受入れますが、無理をされないように。芹沢文学研究会の会員の方で、芹沢文学・大分友の会にも入会いただいている方々にも会員の継続をお願いいたします。

\*どうしても退会されます方は、ハガキ等にて御一報下さい。



コム・マメール

—わが母の如く—

芹沢光治良

もう二十年も前のことである。第一次世界大戦後数年たつて、フランスが今日の日本のように、インフレーションと社会不安に苦しんでいる時、私はパリ大学で勉強していたことがある。

その頃、私は親しいフランスの少女達に、きまつてきいてみた。

「大きくなつたら、なにになりますか」と。

なぜ最初そんな質問をする氣になつたのか、動機は忘れたが、その頃私のところに女の子が産れて、フランス人の家庭にあづけたので、その赤ん坊の將來についていろいろ考えたことから、そうきいて見たのがはじまりだつたかも知れない。しかし、そうきいてみて、返事が面白かつたので、次第に親しい家の少女達に、誰にも同じ質問をしたような氣がする。

というのは、どの少女も異口同音にはづかしがらずに、先づ、「コムマメール（私のお母さんのように）」と、答えるのだつた。

將來お母さんになりたい——と、ためらうことなく答えられるフランスの少女達は、如何に倅せであろう。その言葉のなかには、母に対する愛情とともに、尊敬がふくまれていたが、また、母に対する感謝が鳴り響いてもいた。娘にそう云はれて、恥づることのないフランスの母達も幸福であろうと、私はつくづく思つた。

お母さんのように——と答へただけでは、足りなくて、それから、科学を勉強してみたいとか、地理の勉強をするつもりであるとか、文學をするのだとか、どの少女も具体的にこまかに話すのだつた。

私の大学のクラスにも、女の大学生が多かつた。男の大学生よりも多いくらいであつた。大学の偉い博士の研究室で、私は研究させてもらつたが、そこにも若いフランスの娘がいた。いつしよに勉強していると、親しい友達になつたが、「大きくなつたら何になるか」とは、もうこの人々にはきけなかつた。しかし、次第にその家庭をも知るようになってみると、その人々も少女達のように、「わが母の如く」なろうと努力していることがすぐ分つた。母に対する愛情や尊敬が、ごくつまらないことにもあらはれたから。

ひまわり (月刊) 第一卷第六號  
定價: 5圓 (〒2.00)  
昭和二十二年八月二十五日印刷  
昭和二十二年九月一日發行  
編集人 中原淳一  
發行人 中原啓一  
印刷人 大橋芳雄

---

直接購讀料 (概算)  
一年 300圓  
送料 24.00  
(一年分)

---

印刷所 共同印刷株式會社  
東京都文京區久堅町一〇八  
發行所 ヒマワリ社  
(會員番號A208031)  
東京都千代田區神田保町三の三  
編集所 ひまわり編集部  
東京都文京區富田豊川町三  
配給元 日本出版配給株式會社

昭和22(1947)年9月1日[8・9月合併号]中原蒼二發行。巻頭。

大学でも研究室でも、論文を書かなければならないが、先づ読んでもらうのがお母さんであり、お母さんの意見にしたがつて論文を訂正していた。大学の卒業試験で、口述試験にはお母さんが必ず傍聴するので、試験勉強をするのだと云っていた娘さんもある。

日本へ歸つて、私の子供が大きくなるにつれて、私はフランスの少女達にした質問を、日本の少女達にもしてみようになつた。

「大きくなつたらなにになりますか」と。  
しかし、日本の少女達はフランスの少女達のように、すぐ答えてはくれない。数人いる場合には、たがいに顔を見合せて、くすくす笑うが、希望も意見も述べない。そして、私がいなくなると、べちゃくちゃそのことでおしゃべりを初めるのが普通である。

そして、自分のお母さんになりたいという者は殆どなく、強いてきけば、お母さんのようになりたくはないと、答える者が多いようである。なんと悲しいことであろう。そう答える少女も不幸であるが、そのお母さんも不幸であり、少女達がそう答えるというところに、日本の不幸があつたように考えられる。日本の少女もお母さんに愛情を持たないのではないが、尊敬しないからであろうか。

皆さんも新憲法が公布せられ、民法の改正があつて、女性が解放せられたというようなことを、恐らく聞いたことであろう。

実際、日本では長い長い間、女性の社会的な地位が低く、女性は家庭でも、社会でも、目立たない仕事をしていて、むくいられることがすくなかつた。才能があつても、女性なるが故にそれをのばすこともできず、向学心にもえても、男性のように学問の門もひらかれていなかつた。ただ忍従の生活をしなければならなかつた。こうした不幸な女性の生活を、日本の少女達が眞近く見るのが、自分の母親の生活であるから、お母さんのようになりたくない、自然に感ずるようになったのではなからうか。

しかし、不幸な敗戦の結果、日本の女性も社会的にはフランスの女性と同じような地位におかれたのである。皆さんもこのところ、男女同権になつたとか、男女共学になつたとか、いろいろのことを聞いたであろうし、また、そうした経験もしたであろうが、これは皆さんがまだその意味がほんとうには理解できないほど、女性にとつてすばらしい重大なことである。それは、日本の女性も、男性とともに、日本の將來を背負つてたたなければならぬ責任と誇りとを、公にみとめられたことである。

こんな風に公にみとめられた女性の地位を、これから皆さんの力で、名実ともにそなわつたものにしなければならぬ責任を、皆さんは持つている。それには、皆さんが將來母となつた時に、皆さんの娘達から、コムマメールと、理想的な女性としてあがめられるようになるように、今から努力しなければならぬと思う。